

福井城下における旧松岡藩士の拝領地* 松岡藩士とその屋敷地の研究 その4

伊豆蔵 庫喜^{*1}, 多米 淑人^{*2}, 吉田 純一^{*1}

The Samurai Residences given to the former Matsuoka Clansman in Fukui Castle Town A Study on the Samurai's Premises in the Matsuoka Clansman, part 4

Kouki IZUKURA^{*1}, Yoshihito TAME^{*2} and Junichi YOSHIDA^{*1}

^{*1} FUT Fukui Castle and Castle Town Research Laboratory

This paper considers the Samurai residences given to the former Matsuoka clansman in Fukui Castle Town. In upper Samurai's town of the near Fukui castle Honmaru, the high rank of the *Bangai clansman person* in the Matsuoka age was distributed. The *Shin-yashiki 1Ku* was populated with migrants from the center of Matsuoka castle town. The Samurai residences under Fukui castle town were narrower than the Matsuoka period. The Samurai residence given to the *Bangai clansman person* was based on the area of the upper Samurai of the Fukui clan. The Samurai residence given to the *Bangumi clansman person* was based on the area of the intermediate Samurai of the Fukui clan.

Key Words: 福井城下, 拝領地, 旧松岡藩士, 番外藩士, 番組藩士, 居住区

1. はじめに

本研究は福井藩の支藩である松岡藩⁽¹⁾の藩士に着目し, 松岡城下における武家屋敷地の分布や屋敷割および個々の屋敷地の位置や大きさについて検討するとともに, 享保6年(1721)の福井藩への併合に伴う松岡藩士の推移や福井城下における拝領地に関して考察する. 既報⁽²⁾では, 松岡藩士の移住に要した期間は享保8年(1723)から元文4年(1739)までの16年であったこと, 移住先が特定できたのは111名であったことなどを指摘した.

別報⁽³⁾では正徳4年(1714)の『松岡家中絵図』⁽⁴⁾を用いて, 松岡城下における屋敷地の分布は, 家格や身分によって居住区が分けられていたこと, 家格や禄高が上位の番外藩士(以下, 番外)の方が広い屋敷地が与えられていたことなどを明らかにした.

本報はその続報で, 福井城下における旧松岡藩士の拝領地の屋敷割や敷地の大小と, 松岡時代の家格や禄高の高低, 居住区との関連性について検討する. なお, 福井移住後の旧松岡藩士においても, 屋敷替えが頻繁に行われており, 本報は福井城下で最初に拝領した屋敷地を対象とする.

2. 松岡藩士について

2.1 家格と役職, 禄高

島田和三郎家所蔵の『松岡様御給帳』⁽⁵⁾によると, 延宝4年(1676)頃の松岡藩士の数は, 医師や諸役などを含めると189家である. このうち164家が士族にあたり, 家格別にみると番外が40家, これに次ぐ番組藩士(以下, 番組)が124家で, 士族以外は番組医師が12家, 番組医師が6家, 小役人や御徒など7家ある⁽⁶⁾. これら189家のうち, 正徳4年の『松岡家中絵図』において屋敷地がわかるのは, 124家である.

* 原稿受付 2020年5月29日

^{*1} FUT 福井城郭研究所

^{*2} 工学部 建築土木工学科

E-mail: kouki-i@fukui-ut.ac.jp

2.1.1 番外藩士

番外40家は、職位から概ね3つに区分できる。最上位の役職である「家老・城代」に就ける家は、中根勘負家、秋田八郎兵衛家、明石縫殿家、松原郷右衛門家、雨森傳右衛門家の5家のみである。中位の「番頭・奏者・寺社奉行」に就けるのは、渋谷弥祝家や磯野多宮家など10家で、残りの浅井源左衛門家や雨森新七家など25家は「算奉行・目付・徒頭・膳番」などの職に就ける。

禄高は、家老・城代の5家は、中根家の500石、他の4家はいずれも400石である。これに次ぐ、番頭・奏者などに就ける10家は、渋谷家が300石で、残りの9家は200石～250石である。一番下位の算奉行・目付などに就ける25家の禄高は100石～200石である。

2.1.2 番組藩士

番組の124家も職位から2つに分けられる。伊藤十之進家や猪子三郎左衛門家ら20家が「中頭・奥小姓・祐筆」に就け、残りの104家は御代官や作事奉行および台所頭などの職に就いている。

禄高は、中頭・奥小姓などに就ける伊藤十之進家や猪子三郎左衛門家ら18家が100石～250石であるのに対して、御代官・作事奉行などに就ける栗田七郎右衛門家や村尾武太夫家など104家は50石以下の家が多い。

2.1.3 その他

以上164家の士族のほか、「番外医師」の12家の禄高は、細井玄春家が200石で、引間玄蕃家が25石5人扶持である。これに次いで「番組医師」6家の禄高は、藤田宗繁家が15石5人扶持で、岩佐瑞雲家が15石5人扶持である。この他、小役人の村井惣助家が15石3人扶持、山本仁左衛門家が12石3人扶持である。

3. 松岡城下における屋敷地

3.1 屋敷地の分布

図1は、正徳4年の『松岡家中絵図』において、居住者や間口と奥行を特定できる127筆の屋敷地を番外（青色）、番組（赤色）、医師（黄色）、小役人（緑色）など色分けして示したものである。さらに、区域を御屋敷周りの中心部（A区）、その周辺部（B区）、新町（C区）に区分けしている。なお、図1に記した各屋敷地の記号や番号は筆者が便宜上、付けたものである。

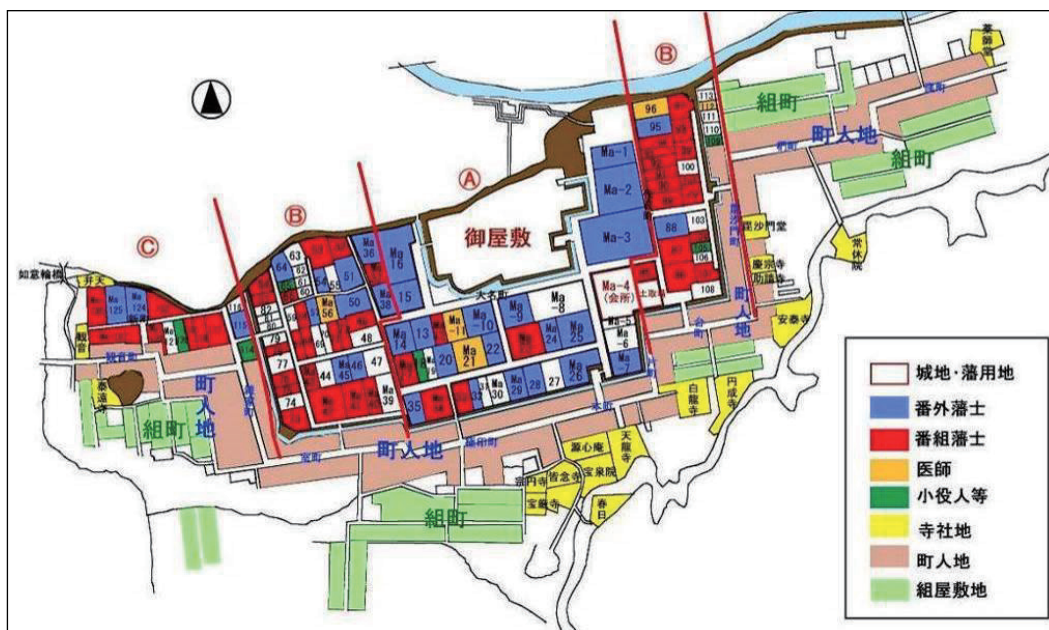


図1 正徳4年の松岡城下の屋敷割（『松岡家中絵図』を基に作図した）

3.1.1 A区（中心部）

中心部のA区には、御屋敷の東側および南側から西側にかけての1重目の堀沿いの大名町にある12筆（Ma-1～3, Ma-8～16）と、大名町の一筋南側の通りに面する18筆（Ma-17～35）、大手門から藩主が住む御屋敷に通じる通り（南北方向）沿いにある2筆（Ma-6～7）の計32筆の武家屋敷地がある。

そして、1重目の堀沿いの大名町には、番外の「家老・城代」に就ける5家のうち中根勘負家（Ma-3）、秋田八郎兵衛家（Ma-9）、明石縫殿家（Ma-10）、松原傳右衛門家（Ma-16）など4家の屋敷がある。その他、御館の東側に磯野多宮家（Ma-1）、渋谷弥祝家（Ma-2）が並び、南側に浅井源左衛門家（Ma-13）、前波丹下家（Ma-14）、西側に蜷川七郎兵衛家（Ma-15）など番外の屋敷が御屋敷を囲むように配されている。

大名町の一筋南側の通り沿いの屋敷地は、通りを挟んで北側に9筆、南側に10筆ある。北側の屋敷地は、雨森傳右衛門家（Ma-25）、青山登家（Ma-26）や横田兵蔵家（Ma-20）など番外4家と奈良助左衛門家（Ma-23）と菌田七郎家（Ma-23）の番組2家のほか、一部御徒の生駒比箇家（Ma-18）や番外医師の樋口養心家（Ma-19）が混在している。また、通りの南側には、秋田勘解由家（Ma-26）、久世少吉家（Ma-28）、出浦宮内左衛門家（Ma-29）ら番外5家と、番組の木村丹治家（Ma-33）や栗田七郎右衛門家（Ma-34）の屋敷がある。

以上、A区は32筆中20筆が番外の屋敷地で、特に御屋敷に近い大名町は家老の中根勘負家をはじめ、城代の雨森傳右衛門家や明石縫殿家などが集中していること、番外の禄高は200石を超える家が多いことが指摘できる。

3.1.2 B区（周辺部）

B区は、A区の東と西の外側に配されている武家屋敷地である。西側に49筆、東側に29筆あり、武家屋敷地127筆全体の約6割を占めている。西側には佐々木小左衛門家（Ma-50）や中川主膳家（Ma-51）など9筆の番外の屋敷がみられるが、番組の屋敷が20筆と多く、そのほとんどが禄高20石前後の家である。それ以外の19筆の居住者の名前は、『松岡様御給帳』には記載されてなく、家格や禄高を特定することはできない。

対する東側の代官町は、尾高治部衛門家（Ma-88）と雨森三右衛門家（Ma-95）の番外2家以外は、すべて番組の屋敷である。代官町の一筋東側、二重目の堀沿いにある屋敷地も、12筆のうち7筆が番組の屋敷地である。番組に属しているが、白石雪水家（Ma-90）の禄高は250石で、相沢八郎右衛門家（Ma-89）は200石、猪子三郎左衛門家（Ma-92）と一柳金七家（Ma-93）と森田勘助家（Ma-96）の3家は100石であり、これら5家は番外に匹敵する禄高を有している。

一方、土居の外側、町人地と接する東端隅の一画にも5筆の武家屋敷地があり、番組医師の岩佐瑞雲家（Ma-112）、村井惣助家（Ma-109）の屋敷が確認できるが、番外あるいは番組の屋敷地は1筆もみられない。したがって、A区の外側にあるB区は、番組の屋敷地が多く配されていることから、中級武家の居住区と認められる。

3.1.3 C区（新町）

C区は武家屋敷地の西端の一画を指し、新町と呼ばれていた。ここには武家屋敷11筆があり、番外の片山弥五右衛門家（Ma-124）や河合彦作家（Ma-125）、番組の田辺五太夫家（Ma-117）や牧野嘉兵衛家（Ma-118）や諸木野半太夫家（Ma-127）らの屋敷地が通りの両側にある。

3.2 屋敷地の大きさ

3.2.1 間口と奥行

松岡城下の武家屋敷地において、間口が最も大きいのは46間で番外の松原郷左衛門家の屋敷地である。これに次ぐのが、間口44間の白石要人家、片山与三右衛門家が34間である。その他、10間以上～20間未満が58筆、20間以上～30間未満が24筆、10間未満が32筆で、間口は全体の約9割が10間～30間である。

奥行の最大は奥行50間で、番外の中根勘負家である。次いで渋谷弥祝家が34間、磯野多宮家が32間で続き、30間が片山弥五右衛門家と河合彦作家の2家である。

なかでも、奥行 25 間の屋敷地は 47 筆と多い。この他、奥行 30 間を超えるのは、前述した中根鞆負家など 5 筆のみで、残りはすべて 10 間代～30 間代である。

3.2.2 面積（坪数）

127 筆のうち、面積が最も大きい屋敷地は番外の中根鞆負家（500 石）の 1750 坪である。同じ番外の渋谷弥祝家（300 石）の 1224 坪がこれに次ぎ、白石要人家の 1100 坪および番外の松原郷左衛門家（400 石）の 1090 坪である。これに対して、最小は 120 坪で宮塚三右衛門家や中村閑五家など 3 家である。

家格ごとの坪数をみると、番外は 400 坪以上～600 坪未満が 15 筆あって最も多い。200 坪以上～400 坪未満が 10 筆、600 坪以上～800 坪未満が 4 筆である。その他は、1000 坪を超えるのは 3 筆である。したがって、番外の屋敷地の大きさは 1000 坪を超える 3 筆を除いて、概ね 200 坪～650 坪とみてよい。

番組は 200 坪以上～400 坪未満が 30 筆で最も多く、次いで 400 坪以上～600 坪未満が 10 筆、100 坪未満が 5 筆、600 坪以上～800 坪未満が 1 筆ある。1000 坪を超える屋敷地は 1 例もない。

以上のように、家格や禄高が上位である番外のほうが広い屋敷地をもつ家が多いことが認められる。

4. 福井移住後の屋敷地について

これまで述べたように、正徳 4 年の『松岡家中絵図』において、居住者が特定できる藩士の屋敷地は 127 筆である。天保 2 年（1831）の『御家中転宅考』⁷⁾（以下、『転宅考』）の史料であるが、これには屋敷地ごとに慶長から天保 2 年までの居住者が代々明記されており、先の 127 家のなかで『転宅考』に記されている名前と照合できるのは 70 家である。これら 70 家が福井城下で拝領した屋敷地の町名、間口、奥行ならびに、それらの間数を基に算定した坪数を示したのが後掲する表 1 である。さらに、表 1 には 70 家の松岡時代の居住区、家格、役職、禄高のほか、敷地の間口、奥行および坪数も示している。

また、後掲の図 2 は享和 3 年（1803）の『福井分間之図』⁸⁾を書き起こしたもので、松岡時代の番外の敷地を青色、番組の敷地を赤色、医師の敷地を黄色で表し、前述した松岡城下を 3 つに分けた A 区～C 区についても、図 2 に併記している。

4.1 移住先について

福井城下の東南部の新屋敷および足羽川の南にある毛矢町は貞享 3 年（1686）の大法⁹⁾以降、空き地や畑地になっていたが、松岡藩士の移住によって再び武家屋敷地に戻されたことは既に報告している¹⁰⁾。

4.1.1 新屋敷

新屋敷には最も多い 34 家が松岡から移住している。そのなかでも、新屋敷①区への移住は 17 家と多く、いずれも松岡時代の番外の明石縫殿家や前波丹下家など 7 家で、松岡城下の中心部（A 区）から移っている。城下周辺部（B 区）からの移住は 8 家で、番外の片山与三右衛門家と佐々木小左衛門家、番組の吉岡伝吾家や筒井左内家など 5 家と番外医師の藤田宗繁家が含まれる。新町の C 区から移住したのは、神戸六左衛門家と河合彦作家とともに番外である。

②区への移住は 8 家で、松岡時代の家格が特定できない加藤清兵衛家を除く 7 家はすべて番組であり、A 区から移った佐野内半治家と C 区の田辺五太夫家以外は、B 区からの移住者が占めている。

③区への移住は 6 家である。②区同様、A 区からの藺田七郎家以外は、すべて B 区からの移住者である。これ以外の区域には、B 区から番組の吉田猪太夫家と村尾武太夫家、C 区から同じ番組の牧野嘉兵衛家が新屋敷に移住している。

一方、移住地の分布を示す図 2 をみると、①区には松岡城下の中心部（A 区）からの移住者が集中しており、その殆どが青色で示した番外の屋敷地であること、②区と③区は周辺部（B 区）からの移住者が多く、赤色で示す番組の屋敷地が占めていることなどが認められる。①区～③区の屋敷割をみると、松岡藩士の拝領地が空地もなくほぼ均等に配されている。

表1 松岡藩士の屋敷地（福井城下・松岡城下）

福井城下					松岡城下										坪数の差 (坪)	
氏名	町名	間口 (間)	奥行 (間)	坪数 a (坪)	区 画	正徳3年(1713) 屋敷地番号	町名	家格	役職	禄高	間口 (間)	奥行 (間)	坪数 b (坪)	(a-b)		
蛭川七郎兵衛	毛矢町	11	23	256		A	Ma-015	大名町	番外	御奏者	200	23	20		460	▲ 204
雨森傳右衛門	毛矢町	23	24	541			Ma-025		番外	御城代	400	26	25		650	▲ 109
出浦宮内左衛門	毛矢町	18	20	352	Ma-029			番外	御持筒頭	200	24	25	600	▲ 248		
土屋小弥太	毛矢町	15	23	354	Ma-035			番外	御先物頭	200	14	25	350	4		
栗田七郎右衛門	毛矢町	11	20	223	Ma-034			番組	御武具奉行	20石5人扶持	20	25	500	▲ 277		
奈良助左衛門	毛矢町	20	18	358	Ma-023			番組		150	16	25	400	▲ 42		
明石縫殿	新屋敷1	14	24	329	Ma-010		大名町	番外		400	24	25	600	▲ 271		
前波丹下	新屋敷1	12	19	214	Ma-014		大名町	番外	御膳番	100石3人扶持	20	25	500	▲ 286		
横田兵藏	新屋敷1	16	21	345	Ma-020			番外	御目付	200	16	25	400	▲ 55		
青山登	新屋敷1	20	25	500	Ma-024			番外	御奏者兼御小姓支配	200	14	25	350	150		
久世少吉	新屋敷1	17	25	425	Ma-028			番外	御徒頭	100	14	25	350	75		
磯野無二	新屋敷1	15	24	371	Ma-032			番外	御普請奉行	100	8	25	200	171		
秋田勘解由	新屋敷1	13	17	223	Ma-026			番外		250	20	25	500	▲ 277		
佐野内半治	新屋敷2	12	19	231	Ma-012		大名町	番組	定江戸	20石5人扶持	10	25	250	▲ 19		
藺田七郎	新屋敷3	12	19	231	Ma-017			番組	中頭	100	14	25	350	▲ 119		
磯野多宮	御泉水町	18	33	598	Ma-001		代官町	番外		250	16	32	512	86		
渋谷弥税	御泉水町	18	33	598	Ma-002		代官町	番外		300	36	34	1224	▲ 626		
中根勘負	神明前	26	41	1056	Ma-003		代官町	番外	家老	500	35	50	1750	▲ 694		
雨森新七	中ノ馬場	19	56	994	Ma-022			番外	算奉行	200	17	25	413	581		
秋田八郎兵衛	滝ヶ鼻	24	28	688	Ma-009		大名町	番外		400	13	25	325	363		
小林久兵衛	毛矢町	12	18	221	Ma-038		大名町	番外	御旗奉行	150	25	19	475	▲ 254		
久津見多忠	毛矢町	16	14	229	Ma-045			番外	無役	100	22	26	581	▲ 352		
中川主膳	毛矢町	20	17	352	Ma-051			番外	御普請頭御奏者	250	24	20	480	▲ 128		
梯左仲左	毛矢町	12	18	221	Ma-054			番外	御水主頭	150	10	20	200	21		
金子六右衛門	毛矢町	10	22	223	Ma-057			番外	無役	50石5人扶持	10	20	200	23		
加藤忠兵衛	毛矢町	12	18	221	Ma-064			番外	御近習目付	100	18	15	270	▲ 49		
尾高治部衛門	毛矢町	9	23	197	Ma-088		代官町	番外	寺社町郡奉行	250	18	25	450	▲ 253		
三岡数馬	毛矢町	15	19	280	Ma-041			番組	中頭	100	15	26	390	▲ 110		
茂木清太夫	毛矢町	10	21	215	Ma-066			番組	御番頭	20石4人扶持	18	15	270	▲ 55		
大河原金左衛門	毛矢町	10	22	223	Ma-067			番組	家老祐筆	20石4人扶持	8	25	200	23		
石川金吾	毛矢町	10	22	223	Ma-068			番組	御金奉行納方	20石4人扶持	8	25	200	23		
大谷傳七	毛矢町	10	22	223	Ma-071			番組		20石4人扶持	8	25	200	23		
伊藤助十郎	毛矢町	9	23	218	Ma-072			番組		20石5人扶持	8	25	200	18		
三上衛士	毛矢町	9	23	218	Ma-083			番組		25石4人扶持	10	20	200	18		
雨森藤右衛門	毛矢町	9	23	218	Ma-084			番組		100	13	20	260	▲ 42		
内海道安	毛矢町	10	23	223	Ma-056			番外医師		70俵	16	20	310	▲ 87		
片山与三右衛門	新屋敷1	20	20	390	Ma-036			番外	無役	200	34	19	646	▲ 256		
佐々木小左衛門	新屋敷1	16	22	362	B	Ma-050	番外	寺社町郡奉行	200	18	28	490	▲ 128			
吉岡伝吾	新屋敷1	12	24	295		Ma-040		番組		20石4人扶持	12	26	299	▲ 4		
筒井左内	新屋敷1	12	19	214		Ma-043		番組	御小姓	20石4人扶持	12	20	240	▲ 26		
芦田八郎左衛門	新屋敷1	14	24	329		Ma-073		番組	御代官	23石4人扶持	19	20	380	▲ 51		
猪子三郎左衛門	新屋敷1	12	19	214		Ma-089	代官町	番組	中頭	100	12	25	300	▲ 86		
中村庄助	新屋敷1	12	18	209		Ma-094	代官町	番組		20石5人扶持	12	27	318	▲ 109		
藤田宗繁	新屋敷1	12	19	231		Ma-096	代官町	番組医師	御案乃御坊主頭	15石5人扶持	14	27	371	▲ 140		
小川又左衛門	新屋敷2	21	20	428		Ma-052		番組		20石5人扶持	■	■				
高久富太夫	新屋敷2	12	19	231		Ma-092	代官町	番組		25石5人扶持	8	25	200	31		
森田勘助	新屋敷2	12	18	221		Ma-093	代官町	番組		100	16	25	400	▲ 179		
蛭川三五右衛門	新屋敷2	13	18	226		Ma-099		番組		100	14	15	210	16		
久野忠左衛門	新屋敷2	12	19	231		Ma-102		番組	小納戸御腰物	12石3人扶持	15	15	225	6		
加藤清兵衛	新屋敷2	11	20	228		Ma-106			御勘定方吞込	22石4人扶持	8	15	120	108		
一柳金七	新屋敷3	12	19	231		Ma-090	代官町	番組		100	12	25	300	▲ 69		
波々伯部与八	新屋敷3	12	19	231		Ma-098		番組	御祐筆	20石4人扶持	17	15	255	▲ 24		
市村喜六	新屋敷3	12	19	231		Ma-101		番組		20石4人扶持	8	15	120	111		
長崎藤四郎	新屋敷3	13	18	227	Ma-100						12	25	300	▲ 73		
岩佐瑞雲	新屋敷3	12	19	231	Ma-112		番組医師	番組医師	15石5人扶持	8	14	107	124			
吉田猪太夫	新屋敷	11	20	215	Ma-053		番組		20石5人扶持	20	23	460	▲ 245			
村尾武太夫	新屋敷	11	20	215	Ma-076		番組	御武具奉行	20石5人扶持	10	20	200	15			
高屋儀右衛門	奥東光寺町	12	18	221	Ma-085		番組		50	13	18	232	▲ 10			
武沢大七	城ノ橋	12	17	217	Ma-107		番組		17石4人扶持	15	15	225	▲ 8			
吉倉源次	毛矢町	16	14	225	Ma-119	新町	番組		10石4人扶持	8	25	200	25			
久津見庄藏	毛矢町	21	10	217	Ma-122	新町	番組	大納戸	20石4人扶持	12	14	168	49			
沢木所右衛門	毛矢町	10	22	224	Ma-123	新町	番組		100	33	24	792	▲ 568			
成瀬藤次郎	毛矢町	19	12	222	Ma-126	新町	番組		20石5人扶持	15	30	428	▲ 206			
諸木野半太夫	毛矢町	10	22	223	Ma-127	新町	番組		20石10人扶持	29	14	406	▲ 183			
坂巻十右衛門	毛矢町	15	19	280	C	Ma-114				25石5人扶持	10	25	250	30		
神戸六左衛門	新屋敷1	3	18	58		Ma-115		番外	御長柄奉行	150	21	15	315	▲ 257		
河合彦作	新屋敷1	19	24	469		Ma-125	新町	番外	御徒頭	100	15	30	435	34		
田辺五太夫	新屋敷2	18	23	414		Ma-117	新町	番組	奥御小姓	150	25	16	400	14		
牧野嘉兵衛	新屋敷	12	19	228		Ma-118	新町	番組	御作事奉行	20石4人扶持	8	25	200	28		
片山弥五右衛門	天草町	18	22	409		Ma-124	新町	番外	御目付	200	16	30	465	▲ 56		

▲は減少

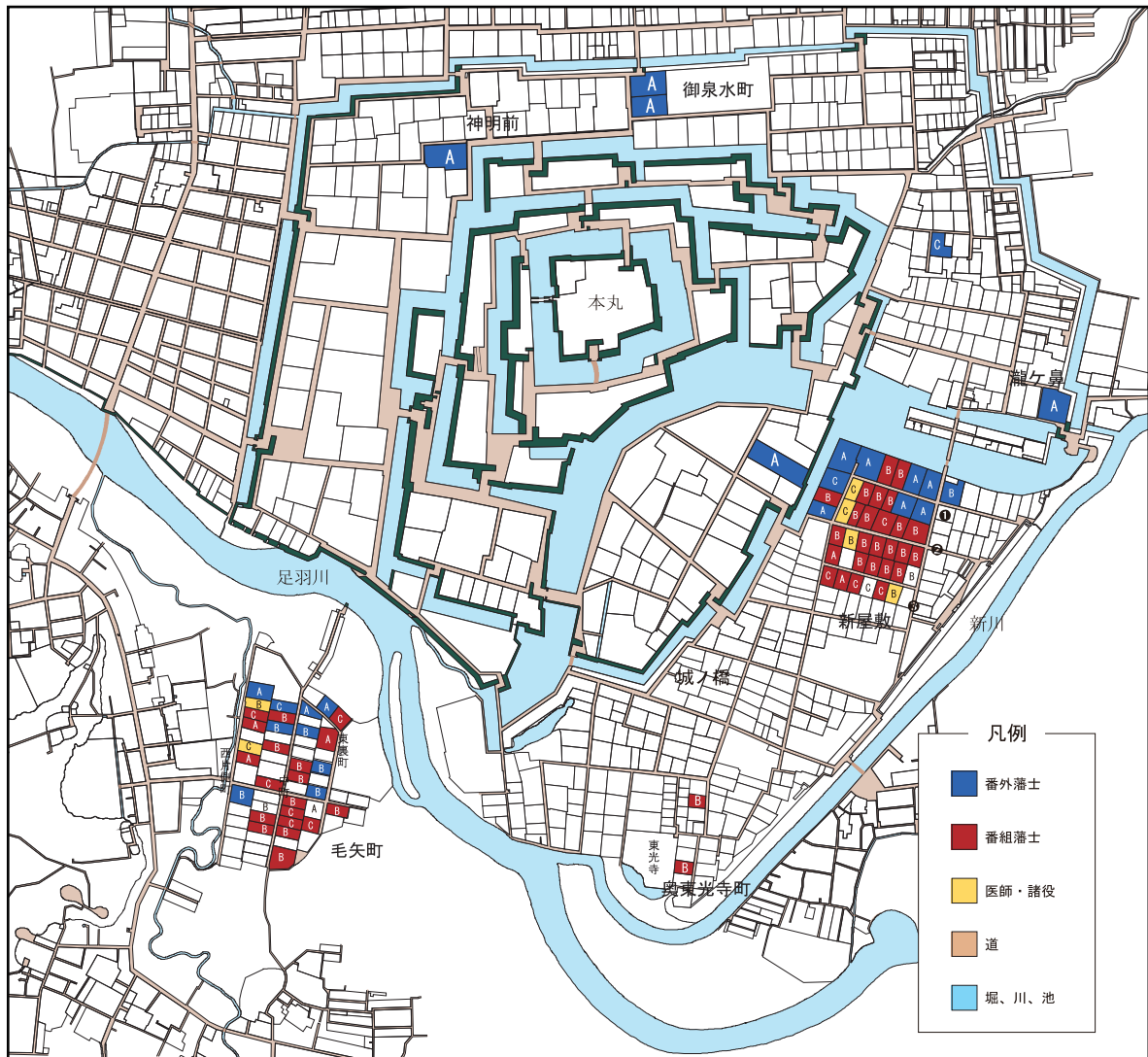
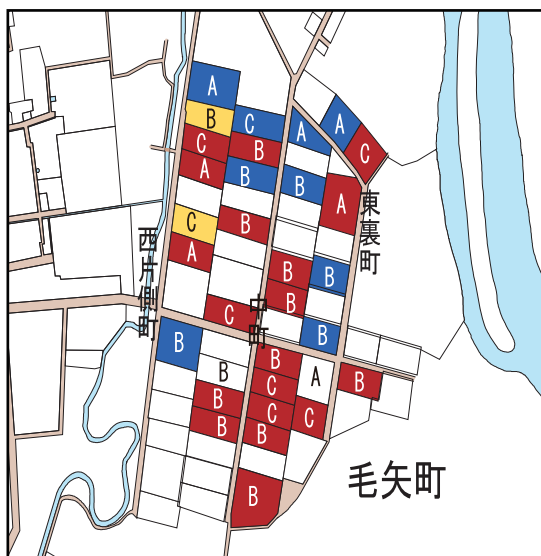
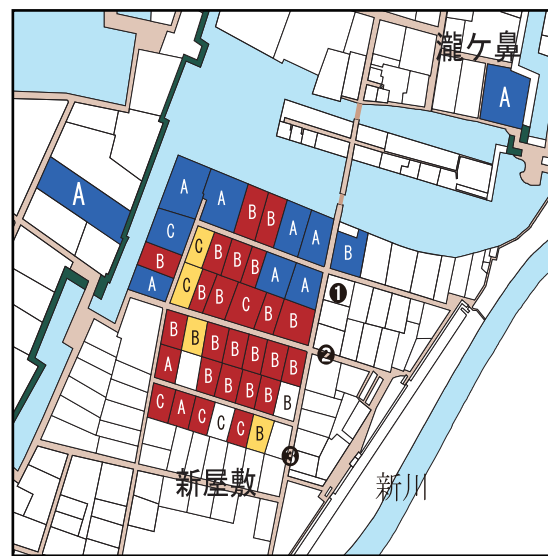


図2 旧松岡藩士の拝領地（享和3年の『福井分間之図』を基に作図した）



毛矢町の拝領地（図2の拡大図）



新屋敷の拝領地（図2の拡大図）

図2のAは松岡城下中心部から移住者、Bは城下周辺部からの移住者、Cは新町からの移住者を示す。

4.1.2 毛矢町

橋南の毛矢町にも28家移住している。松岡城下の中心部（A区）からの移住者は6家で、番外の蜷川七郎兵衛家や雨森傳右衛門家など4家、番組の栗田七郎右衛門家、奈良助左衛門家である。城下周辺部（B区）からの移住者が16家と多く、小林久兵衛家や久津見多忠家ら番外7家、三岡数馬家や茂木清太夫家など番組8家と番外医師の内海道安家が含まれる。新町のC区からの移住は6家で、松岡時代の家格が確認できない坂巻十右衛門家以外はすべて番組である。

図2をみると、毛矢町の全域に松岡時代のA区～C区の移住者の屋敷地が点在している。なかでも、北側（本丸方面）の区域には、A区からの移住者が集中し、南端の区域にはB区とC区からの移住者が多く配されている。

4.1.3 その他

新屋敷と毛矢町のほか、福井城下の上級武家町である神明前に家老の中根鞠負家、御泉水町に磯野多宮家と渋谷弥悦家、中ノ馬場に雨森新七家など4家の番外藩士がA区から移住している。このうち、御泉水町の磯野多宮家と渋谷弥悦家は、享保11年（1726）に藩主別邸の御泉水邸の西側部分を縮小して武家地に戻された屋敷地が与えられている⁽¹¹⁾。また、中根鞠負家や雨森新七家の屋敷地は、松岡からの移住が始まる享保8年（1723）以前から瀧主計家（神明前）や浅見徳右衛門家（中ノ馬場）ら福井藩士が住んでいた屋敷地を拝領している⁽¹²⁾。

この他、城下の東端の下級武家町にあたる瀧ノ鼻にA区から番外の秋田八郎兵衛家が、天草町にはC区から同じ番外の片山弥五右衛門家が移っている。したがって、松岡城下の中心部に住み番外上位であった中根鞠負家や雨森新七家は、福井城下においても神明前や中ノ馬場など上級武家町に移住していることが指摘できる。

これら6家のほかに、B区から番組の高屋儀右衛門家が奥東光寺町に、武沢大七家が城ノ橋に移っている。

以上、述べてきた旧松岡藩士70家の福井移住後の町別の拝領地ならびに、松岡時代の家格と区画した居住区を示したものが表2である。

表2 町別にみた旧松岡藩士の拝領地と松岡時代の家格と居住区

町名 (福井城下)		毛矢町(28)				神明前(1)		御泉水町(2)		中ノ馬場(1)		瀧ノ鼻(1)		天草町(1)	
家格(松岡時代)		番外	番組	番外医師	その他	番外	番組	番外	番組	番外	番組	番外	番組	番外	番組
区画 (松岡城下)	A	4	2			1		2		1		1			
	B	7	8	1											
	C		5		1									1	
		11	15	1	1	1	0	2	0	1	0	1	0	1	0

町名 (福井城下)		新屋敷										奥東光寺町(1)		城ノ橋(1)	
		1番町(17)			2番町(8)			3番町(6)			その他(3)				
家格(松岡時代)		番外	番組	番外医師	番外	番組	その他	番外	番組	番外医師	その他	番組	番外	番組	番組
区画 (松岡城下)	A	7				1			1						
	B	2	5	1		5	1		3	1	1	2		1	1
	C	2				1						1			
		11	5	1	0	7	1	0	4	1	1	3	0	1	1

4.2 拝領地について

4.2.1 間口と奥行

旧松岡藩士が福井城下に拝領した屋敷地のなかで、間口が最も大きいのは、番外の中根鞠負家（神明前）の26間で、これに次ぐのが番外の秋田八郎兵衛家（瀧ノ鼻）の間口24間、同じく番外の雨森傳右衛門家（毛矢町）が23間である。この他、20間以上～30間未満が2筆、10間以上～20間未満が60筆、10間未満が5筆で、間口は全体の9割近くが10間～20間に含まれている。

奥行の最大は、番外の雨森新七家（中ノ馬場）の56間である。次いで中根家と同じ番外の中根鞠負家（神明間）が41間、磯野多宮家（御泉水町）と渋谷弥悦家（御泉水町）が33間で続く。奥行30間を超えるのはこれら4家のみであり、他はすべて10間代～30間代で、特に奥行20間代の屋敷地は25筆と多い。

4.2.2 面積（坪数）

70家のなかで、面積が最も大きいのは、番外の中根鞆負家（神明前）の1056坪である。これに次ぐのが、番外の雨森新七家（中ノ馬場）が994坪、同じく番外の秋田八郎兵衛家（瀧ノ鼻）が688坪で続く。これ以下は、500坪代が毛矢町の雨森傳右衛門家や御泉水町の磯野多宮家など番外4家で、400坪代は番組の小川又左衛門家と田辺五太夫家以外の久世少吉家や河合彦作家など3家も番外である。300坪代は10家あり、やはり毛矢町の出浦宮内左衛門家や土屋小弥太家などの番外が多い。すなわち、300坪を超える屋敷地を拝領した家の多くが、松岡時代の番外である。これまでみてきた福井藩の上級武士の敷地面積（坪数）はほぼ500坪～1000坪であることから⁽¹³⁾、これら番外の坪数はこれに近似している。

200坪代が最多の46家で、移住者の半数を超えていて、そのほとんどが松岡時代の番組である。これについても、福井藩の中級武士の坪数が200坪～400坪であり⁽¹⁴⁾、46家の坪数も福井藩の中級武士の坪数とほぼ合致する。

4.3 坪数の比較について

移住直後に福井城下で拝領した屋敷地の坪数と、これまで住んでいた松岡城下の屋敷地の坪数を対比すると、福井城下の屋敷地の方が広くなった家は28家（40%）あり、逆に狭くなった家は42家（60%）みられる。

区域別にみると、松岡城下の中心部（A区）から移住した20家のなかで7家（35%）が広くなり、13家（65%）が狭くなっている。周辺部（B区）からの39家は15家（38.5%）が広くなり、24家（61.5%）が狭くなる。新町（C区）からの11家は6家（54.5%）が広くなり、5家（45.5%）が狭くなっている。中心部（A区）および周辺部（B区）からの移住者の屋敷地は、松岡時代よりも狭くなった家が多いことが認められる。

坪数が最も広くなった家は、中ノ馬場の雨森新七家（松岡413坪→福井994坪、増581坪）である。雨森新七家に次いで、瀧ノ鼻の秋田八郎兵衛家（松岡325坪→福井688坪、増363坪）が続く。これに対して、最も狭くなった家は、神明前の中根鞆負家（松岡1750坪→福井1056坪、減694坪）、御泉水町の渋谷弥悦家（松岡1224坪→福井598坪、減626坪）である。したがって、坪数の増減が著しい4家は、すべて松岡時代の番外上位の家であり、しかもA区からの移住者である。

一方、松岡城下の坪数との差が10坪未満は、土屋小弥太家（松岡350坪→福井354坪、増4坪）、吉岡伝吾家（松岡299坪→福井295坪、減4坪）、久野忠左衛門家（松岡225坪→福井231坪、増6坪）、武沢大七家（松岡225坪→福井217坪、減8坪）など4家確認できる。

5. おわりに

以上、福井城下における旧松岡藩士の拝領地について検討した結果、福井城下の東南部の新屋敷と橋南の毛矢町に多くの松岡藩士が移住していること、新屋敷①区に松岡城下の中心部（A区）からの移住者が集中していること、福井城本丸に近い上級武家町の神明前に中根鞆負家、中ノ馬場に雨森新七家、御泉水町に渋谷弥悦家と磯野多宮家など松岡時代の番外上位の家が配されていること、中根鞆負家、雨森新七家や秋田八郎兵衛家ら3家に与えられた屋敷地は、福井藩士から屋敷替えされたものであることなどが指摘できる。

一方、屋敷地の大きさは、福井城下の拝領地の方が、松岡時代の屋敷地に比べて狭くなった藩士が多いこと、松岡時代に藩主が住む御屋敷の正面に屋敷を構えていた家老級の中根鞆負家や渋谷弥悦家の敷地面積（坪数）が狭くなったこと、旧松岡藩士に与えられた屋敷地の坪数は、番外藩士が福井藩の上級武士の坪数を基準にしていること、番組藩士の坪数は中級武士の坪数に準じていることなども明らかにできた。

注

- (1) 松岡藩は、正保2年(1645)に福井藩4代藩主松平光通の異母兄弟であった昌勝(3代忠昌の長男)が、吉田郡など7郡5万石を分知されて成立し、その子昌平(後、福井藩9代藩主宗昌)が享保6年(1721)に福井藩を継承し廃藩になるまで76年間存在した福井藩の支藩である。正保3年(1646)には、昌勝付きとして40名余の福井藩士が出向を命じられている。その後、慶安2年(1649)には松岡で屋敷割が行われ、藩士の居地および藩士に従属する足輕、中間、徒歩などの居所も整備されている。
- (2) 伊豆蔵庫喜, 吉田純一, 多米淑人 “享保6年松岡藩併合に伴う武家屋敷地の変動”, 福井工業大学研究紀要, Vol.47 (2017), pp.311-319.
- (3) 伊豆蔵庫喜, 吉田純一, 多米淑人 “松岡城下における武家屋敷地の分布”, 福井工業大学研究紀要, Vol.49 (2019), pp.257-265.
- (4) “松岡家中絵図”, 松平文庫, 福井県文書館保管.
- (5) 野村英一, “松岡町史 上巻”, (1978), pp.208-223, 所収, 松岡町.
- (6) 前掲(5), “松岡町史 上巻”, 参照.
- (7) 大谷氏信, “御家中転宅考”, 天保2年(1831), 松平文庫, 福井県文書館保管.
- (8) “福井分間之図” 享和3年(1803), 松平文庫, 福井県文書館保管.
- (9) 貞享3年(1686)に福井藩は25万石に半知されている。その際、城下東南部の城ノ橋一帯や橋南の毛矢町にあった武家屋敷地の多くは空地や畑地になっている。
- (10) 伊豆蔵庫喜, 吉田純一 “貞享の大法に伴う武家屋敷地の変動”, 福井工業大学研究紀要, Vol.46 (2016), pp.276-284, 参照
- (11) 三上一夫校訂, “越藩史略”, (1975), p428, 享保11年5月15日「是日新泉水第を旧第に併せ移す」, 同24日「是日新第の地を士家となす」とある, 歴史図書社, また, 前掲(7) “御家中転宅考”, 渋谷家と磯野家の屋敷地の条に「宝永五御用地に成り御泉水ノ内入り 享保十一 八月ヨリ再侍屋舗ト成り」とある。
- (12) 福井城下における藩士の屋敷替えについては, 前掲(7), “御家中転宅考”, を参考にしている。
- (13) 福井藩の上級武家屋敷地の坪数については, 伊豆蔵庫喜, “上級武家屋敷地の大きさの比較”, 日本建築学会北陸支部研究報告集, Vol.47, (2004), pp.248-251, で詳しく報告している。
- (14) 福井藩の中級武家屋敷地の坪数については, 伊豆蔵庫喜, “中級武家屋敷地の大きさ”, 日本建築学会大会学術講演梗概集(北海道), (2004), pp.299-300, で報告している。

(2020年9月10日受理)